司会：即座に大量にということではなく、徐々にということか。

梶：おっしゃるとおり、当面爆発的に増えるということはない。

市川：葉鞘褐変について話があったが、当農場の３年間のデータでは発生はない。上川地域では大丈夫だと思うが、どういった地域で葉鞘褐変がでているのか。

梶：市川さんのところは大丈夫だが、当時の試験結果では蘭越の方の地区で発生があり、適さないのではないか。上川では発生の報告はない。

司会：全道で３０haということだが、販売面は単独で行っているのか。集荷しているところはないか。

梶：今のところ産地品種銘柄ではないので、生産者個々が独自の名前をつけて、またはその他米として販売している。

市川：取引先である業者等から、是非産地品種銘柄にしてほしいという要望がある。もちろん種の量を沢山普及させるというのもひとつの例だと思うが、北海道米の層の厚さやブランド価値高めるという面もある。

司会：今年のゆきさやかの検査等級はどうだったか。

市川：今年は１等米ということで、着色粒もなくすごく綺麗なお米ができた。特に問題はない。葉鞘褐変の話は初めて聞いて当農場で発生はないので意外に感じた。

②　「普通大豆及び特定加工用大豆」の「小粒大豆及び極小粒大豆」
「スズマル」の品種群設定及び「中育６９号」の追加について
申請理由：　ホクレン農業協同組合連合会「長谷川」氏
育種経過等：中央農業試験場「藤田」氏
銘柄鑑定：　大豆の検査を行う全登録検査機関からスズマルと中育６９号で差異はない、との申請書の提出があるため割愛する

◎　ホクレン農業協同組合連合会　雑穀課　調査役　長谷川　秀一より説明

ホクレンの長谷川です。よろしくお願いします。申請理由を述べさせていただきます。北海道産納豆用大豆スズマルは、納豆加工適性に優れ、実需者から高く評価されていることから、２ー３千haが安定的に栽培されてきた。しかし、スズマルは近年被害が拡大している、ダイズシストセンチュウに感受性があり、被害が発生した場合は著しく減収するため、生産上深刻な問題となっている。作付け面積は現在２千haを割る１，５８０haとなっている。ダイズシストセンチュウが多発していることから、生産を敬遠する傾向にある。このため、地方独立行政法人道総研にてスズマルと同等の納豆加工適性を持ち、ダイズシストセンチュウ抵抗性を有する中育６９号は育種され、被害発生地区では作付けの拡大が期待されているところです。中育６９号は農業特性、加工適性がスズマルと実質的に同等